季刊 福祉労働 139

summer 2013

障害者・保育・教育の総合誌

現代書館

インターチェンジ・交差点

勝手な時だけ見えないふりをする人と誤解されて

私が会長を務めている視覚障害リハビリテーション協会は、眼科医、歩行訓練士、視覚障害者生活訓練指導員、視能訓練士、教員など視覚障害のある方たちを支援する専門家の集まりで、会員は約四百名です。そこでは、視覚障害のある方に関するあらゆる問題を研究し、情報交換をして、支援の質を上げようと研究発表大会なども開催しています。

世の中の人たちは、視覚障害者というと、全然見えない人をイメージし、点字を使っているということと、盲学校があるということくらいは心存じだと思います。でも、視覚障害者の九割はロービジョンといって、見えにくいけれど、視覚からの情報が使える方たちです。高齢になってから視覚障害になる方が多いので、点字を読める人が非常に少ないことなどは、ほとんど知られていません。そのため、皆さんの施設にもいる「見えない見えにくい人」が、適切な支援を受けることができずに、とてもつらい思いをしています。

そこで、この機会に、私の日々の活動の中で知った「間違った視覚障害者への対応」の例をあげて、少しでも視覚障害のある方に対する支援がしやすくなり、支援する側にもされる側にも役に立つ情報を書いていきたいと思います。

ある特別養護老人ホームの介護職員の方から「私のところにいる目の悪い利用者は、外に買い物に行くときや食堂などに移動するときは、見えなくて怖いから手を引いて欲しいと言うのに、自分の部屋に帰ると、小さな字の文庫本を出して読むし、『あれ、肩に髪の毛がついているから取ってあげる』なんて、すごく小さな物でも見えている。全く勝手なときだけ見えないふりして、わがままで困る」と愚痴を聞かされました。

一口に「見えにくい状態」ロービジョン」といっても、その見え方は、見えにくくなった原因によって千差万別です。網膜色素変性症という難病で見えなくなると、写真のように「視野狭窄」になります。足許は見えないから、段差も分からない、移動は一人では難しいけれど、中心部は見えるので、その見える範囲なら、小さな文字も読めるし、髪の毛だって見つけることができます。

これとは逆に、加齢黄斑変性症という病気で見えにくくなると、中心部分が見えなくなります。ちょうど見たいところが抜けてしま

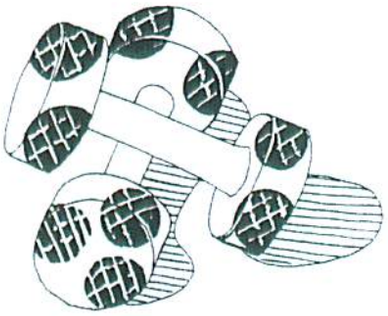
うので、本などは読みにくくなりますし、見えている部分で人の顔などを見ようとしますから、変な方向から相手を見たりします。足許は良く見えるので、自転車などに乗ることもできます。

（視野狭窄）

（中心暗点）

吉野由美子

よしの・ゆみこ
視覚障害リハビリテーション協会長



施設から

ロービジョン者（見えにくい人）が百人いると、その見え方は百通りあるといわれていますし、日本に約百五十万ほどいるだろうと推計されているこの人たちの「見え方」とほとんど世間には理解されていないので、「生活のどこで困るのか」ということも、「わがままだ」とか「勝手なときに見えないふりをする」とか言われて、とてもつらい思いをしています。

利用者の中に視覚障害のある方がいたら、その行動をよく観察してあげて、その方の話をよく聞いてあげてください。たくさん声かけをして、周りの様子を説明してあげてください。そして、利用者を「視覚障害」という観点から見直していただけたらと思うのです。